

## 第一章 主権者または国家の支出（九）

### 第三部 公共事業・公共機関の支出（六）

#### 青少年の教育機関に要する支出（三）

ギリシアとローマの共和政初期の教育は読み書きと算術が中心で、裕福な市民は自宅で奴隷や解放奴隷を家庭教師として学び、貧しい市民は授業料を払って学校に通った。

基礎教育は一貫して親や後見人の裁量と責任に委ねられ、国家が監督や指導を行った形跡はほとんどない。ただし、ソロン法は、子に生計の助けとなる技能や職を教えなかった親については、子の親に対する老後の扶養義務を免除すると定めていた。

教養が洗練され、哲学と修辞が流行するにつれ、上層や良家は子を哲学や修辞の学校・学園へ通わせるようになったが、これらの学校に公的支援はなく、当局も長く黙認にとどまった。両分野の需要は当初きわめて小さく、第一世代の職業教師は一つの都市に定着できず、都市から都市へ移り歩いて教えた。エレアのゼノン、プロタゴラス、ゴルギアス、ヒッピアスがその代表である。やがて需要が高まると、哲学と修辞の学校は

常設化し、まずアテナイに、のちに各地の都市へ広がった。国家の後援は主に専用の講義場所の割り当てで、その一部は私人の寄進でも実現した。国家はプラトンにアカデミアを、アリストテレスにリュケイオンを、ストア派の祖シテウムのゼノンに柱廊を与えたとされる。エピクロスは自らの庭園を学派に遺した。もともと、マルクス・アントニヌスの頃まで、公金から給与を受ける教師は現れず、収入は弟子からの謝礼や授業料に限られた。ルキアノスが伝える哲人皇帝の下賜や恩顧も、当人の在世限りで終わつたとみるのが妥当だ。学位特権に相当する制度はなく、これらの学校に通うことが特定の商売や職業の必須条件とされることもなかった。学校が自らの有用性で弟子を引き寄せられないかぎり、法が就学を義務づけたり、通学者に報奨を与えたりすることもない。教師に生徒への法的管轄権はなく、徳性と力量によって若者から自然に得られる権威だけが認められていた。

ローマでは、市民法の学習は市民一般の教育には含まれず、限られた家柄の教養にとどまった。法を志す若者のための公立の法学校もなく、法に通じたと目された親族や知人のもとへ通って実地に学ぶほかなかった。十二表法の相当部分は古代ギリシア諸都市の法に依拠したとされるが、ギリシアでは法が体系的な学問として成熟したとは言いが

### 3 第一章 主権者または国家の支出（九）

たい。これに対し、ローマでは早くから法学が確立し、法に精通した市民は高い名声を得た。ギリシア、ことにアテナイの通常裁判は大人数で規律に欠け、喧噪や派閥・党派心に押されて評決が偶然に近く左右されがちだった。五百、千、千五百といった規模ともなれば、不当判決の汚名は分散し、個々の負担は軽くなる。他方、ローマの主要裁判所は一人または少数の判事が常に公開の場で審理し、軽率や不公正はただちに評判を傷つけた。このため、疑義のある事件では非難を避けるべく先例に依拠する傾向が強まり、実務と先例重視がローマ法を規則的で整然とした体系へと押し上げた。類似の配慮と姿勢が根づいた国々でも、同様の効果が見られる。ポリュビオスやハリカルナッソスのデイオニュシオスが説くローマ人の品格の優位は、彼らが挙げる事情そのものより、優れた司法制度の構成に負うところが大きかったと考えられる。ローマ人が宣誓をとりわけ重んじたという評価も、慎重で見識ある法廷の前でのみ宣誓する慣行が発言をいっそう慎重にさせた一方、群衆的で無秩序な集会の前では同じ緊張や自制が働きにくかったことによる。

古代ギリシャとローマの市民的・軍事的能力は現代の諸国に匹敵すると広く言われるが、その評価はやや過大である。国家は軍事訓練を除けば体系的な人材育成にほとんど

関与せず、ギリシャの音楽教育も決め手にはならなかった。他方、必要とされる技芸や学問ごとに上層市民向けの教師・講師が現れ、学びの需要が供給を呼び、自由競争が教授の腕を磨いた。古代の哲学者は、聴衆の判断や信念・原則に与える影響力、さらには態度や話しぶりを整える力において、現代の教師をしばしば凌いでいた。これに対し現代では、公立の教師は制度と給与によって保護され、職業上の成否や評判と処遇が結びつきにくく、勤勉さが損なわれがちである。この保護の陰で、私設教師は無補助の商人の立場に置かれ、補助金付きの商人と競う関係に陥る。同じ価格では採算が取れず、破綻は免れても苦しく、値を上げれば顧客が離れて状況はほとんど好転しない。さらに多くの国では、卒業や学位に伴う特典が知的専門職に不可欠つきわめて有利である一方、その取得には公的な講義への出席が前提とされがちだ。たとえ周到で優れた私設指導を受けても、それだけでは特典や資格を得られないことが少なくない。結果として、大学で教えられる諸学の私設教師は学芸の世界で最下層に置かれやすく、有能な者にとって は名誉も収入も得にくい職となった。学校・大学・カレッジの基金は、公立の教師の勤勉を損ねただけでなく、優れた私設教師が成り立つ余地もほとんど奪った。

公的な教育機関がなければ、需要の裏付けのない学説や学問、すなわちその時代に必

要・有用と認められず、せめて流行とすらみなされないものは教えとして成り立たない。私設の教師にとっては、実用的と認められていても時代遅れとして退けられた学説や、無用の銜学・詭弁の寄せ集めと広くみなされる学問を教えても採算は取れない。こうした体系や学問が存続し得るのは、評判に左右されず、市場評価や労働から切り離された収入で運営できる教育法人の内部に限られる。公的な教育制度がなければ、その時代に得られるかぎり最も充実した課程を勤勉と能力で修了した紳士でさえ、世慣れた人びとの会話にのぼる通俗的な話題については何も知らないまま世に出ることになる。

女子教育を担う公的機関は存在しない。そのため、一般の女子教育には無駄や不合理、奇妙さといったものはほとんど見られない。教える内容は、保護者が必要または有益と判断したものに限られる。各科目は実用に直結し、生まれ持った容姿を引き立てる訓練や、慎み・謙虚・貞節・儉約といった徳を養うことを目的とし、将来家庭を任されやすくし、任されたときにふさわしく振る舞えるよう備えさせる。女性は人生のあらゆる局面でその教育の恩恵を受ける一方、男性の教育で最も骨の折れる煩わしい部分が生涯のどこかで役に立つことはきわめて少ない。

では、政府や公共部門は国民教育にまったく配慮しなくてよいのか。配慮や関与が必

要だとすれば、社会の各層に應じて教育のどの領域・要素を重視すべきか。さらに、その配慮をどのような方法・手段で進めるべきか。

社会の状況次第では、政府が関与せずとも、多くの人が社会に求められ受け入れられる能力・徳目・品性の多くを自然に身につけ、育める環境が醸成される。他方、その条件が整わなければ、社会全体の健全性が損なわれ、国民の大多数が全面的な墮落や退廃に陥るのを避けるには、政府の慎重な関与が不可欠である。

分業が進むと、賃金で暮らす多くの人々の仕事は、ごく単純で限られた作業、しばしば一つか二つに絞られる。他方、理解力は日々の職務によって形づくられる。生涯をそうした単純作業に費やし、成果がいつも同じかほとんど変わらないなら、新しい難題に向き合い、工夫や発明に挑む機会はほとんどない。その結果、そうした努力の習慣は薄れ、人は人として許される限り愚かで無知な状態に近づきやすい。心の不活発さは、理性的な会話を楽しみ、そこに参加する力を弱めるだけでなく、高い志や寛大さ、思いやりを抱く力も損ない、私生活のささやかな務めでさえ公正に判断しにくくする。国家の大局的かつ広範な利害は視野の外に置かれ、特別の教育がない限り、戦時に国を守る力も養われない。単調で静的な生活の一樣さは気力を削ぎ、兵士のような不規則で不確実、

しかも冒険的な生き方を本能的に避けさせる。身体の活力も落ち、持ち場以外の仕事では力を活発に、しかも粘り強く発揮しにくくなる。こうして各人の熟練は、知的・社会的・軍事的資質を代償として獲得されているように見える。しかも進んだ文明社会では、政府が予防策を講じないかぎり、労働する貧困層、すなわち大多数の人々は、この状態に避けるがたく陥る。

一方、いわゆる「野蠻」とされた狩猟民や牧畜民、さらに製造業の発達や対外交易の拡大に先立つ、農業が粗放な段階の社会では事情が異なる。各人の仕事は多岐にわたり、絶えず生じる難題に対処するため工夫を凝らすことが求められるので、創意は保たれ、文明社会の下層で見られる無気力には陥らない。そこでは男は皆戦士であり、程度の差はあれ政治にも通じ、社会の利益や統治者の施策をおおむね見極められる。平時の賢明な判断や戦時の優れた指揮の可否も、たいてい見て取れる。しかし、その種の社会で、より文明化した段階の社会にいる少数者が示すような洗練された高度の理解に達するのは難しい。未成熟な社会では個々人の仕事の幅は広いが、社会全体の仕事の種類は多くはなく、各人は他者のすることの大半を自分でもこなせる。知識や機知、工夫は広く行き渡る一方、抜きん出た水準に達する者はまれだが、平均的な水準でも単純な社会の運

営には足りる。これに対し文明社会では、大多數の個々人の職務は単調で少ない反面、社会全体の職務はほとんど無限と言えるほど多様で、この多様さは特定の職に縛られずに他人の仕事を見渡す余裕と意欲のある少数者に、尽きない観察対象を与える。多様な対象の比較と組み合わせが彼らの思考を鍛え、理解力は異例なほど鋭く、しかも広くなる。もつとも、その少数者がよほど特別な地位や役割に就かない限り、その卓越は個人の名誉にとどまり、社会の善政や幸福に大きく寄与しないこともあり、同時に多数者のあいだでは人間の高貴な資質の多くが薄れ、やがて失われかねない。

成熟した商業社会では、庶民の教育こそ公共の支援を最も必要とする。地位や富のある人々は一般に十八歳や十九歳で専門や職業に就き、それまでに社会から信頼される素養を身につけるか、その準備をする時間が与えられている。親や保護者もその実現を強く望み、必要な費用の支出を惜しまない。教育が行き届かない場合でも、その原因は資金の不足そのものより、配分や運用の誤りにあることが多い。問題は教師の絶対数の不足ではなく、確保できる教師が怠慢だったり力量不足だったりして、現状ではよりよい人材を見つけない点にある。さらに、この層が従事する仕事は庶民の仕事のように単純で画一的ではなく、複雑で頭を使うため、知性が刺激不足で鈍ることは少ない。職務



も朝から晩まで絶え間なく人を追い立てる性質のものではなく、概して相応の余暇があり、若い頃に培ったり関心を深めたりした実用的な知識や教養を磨くことができる。

一方で、庶民や労働者層の置かれた現実とは異なる。教育に充てる時間は乏しく、子どもの養育にも手が回らず、費用面でも苦しむことが多い。働ける年頃になれば、すぐに生計を支えるため職に就かざるを得ない。仕事はおおむね単純で画一的、変化に乏しく、理解力や思考力を鍛える機会は限られる。労働は長く厳しく途切れがちでもあり、他の学びや関心に時間も意欲もほとんど割けない。

もつとも、どの文明社会でも、庶民が身分や財産に恵まれた層と同じ水準の教育を受けることは難しい。それでも、教育の根幹である読み・書き・計算は幼い時期に身につくため、技能をあまり要しない仕事に就く者でも、就業前に学ぶ時間は確保しうる。政府などの公的部門は、ごく少ない公費で誰もが学べる環境を整え、普及を促し、学習を奨励し、国民のほぼすべてにその習得を義務づけることができる。

政府が教育機会を広げるには、各教区・地区に小さな学校を設け、授業料は一般の労働者が払える水準に抑え、教師の給与は公費で一部のみ補うのがよい。全額または大半を公費に依存すると、やがて職務への緊張感が薄れ、責務がおろそかになりかねない。

スコットランドでは教区学校の整備が進み、庶民のほぼ全員が読み、かなりの者が書きや計算も身につけた。イングランドでも慈善学校が同様の効果を示したが、制度が行き渡らず、普及は限定的にとどまった。加えて、小学校の読本をより実際的で有益な内容に改め、庶民の子にとって利が乏しい初歩のラテン語に代えて、幾何学と力学の基礎を教えれば、この層の教育は到達可能な範囲で最も整った水準に近づく。幾何学と力学の原理はほぼあらゆる職業に応用でき、現場での活用を通じて理解が段階的に深まり、高度かつ実用的な諸科学への入口となるからである。

公的機関は、基礎学力の習得を後押しするには、その分野で抜きん出た一般家庭の子どもに少額の奨励金や小さな記章を授けて意欲を高めるのが有効だと考えており、社会全体でも、基礎教育の重要な要素を広く身につけさせるうえで同種の仕組みが有効だとの見方が広がっている。

また、公権力などの公的機関は、各種の団体・法人・組合に加入する資格を得る前や、村や市などの自治体で営業を始める前に、基礎教育の中核内容に関する試験や検定、あるいは見習い・実務研修を課すことで、国民の大多数にその習得を事実上避けられない課題として求めることができる。

ギリシャとローマの共和政は、軍事・体育の訓練を受けやすくし、これを奨励し、市民全体に学習を義務づけることで、軍事的気風を保った。学習と実践の場は設けられ、指導権は限られた教師に付与されたが、教師に公費の俸給や排他的特権はなく、報酬は教え子からの授業料に限られた。公設の体育施設で学んだ市民にも、私的に同等の訓練を受けた者に対する法的な優位は一切認められなかった。これらの共和政は、この種の訓練に秀でた者にささやかな賞や記章を与えて習得を促し、オリンピック、イストミア、ネメアの競技会での受賞は本人のみならず家族や親族にも名誉をもたらした。さらに、召集されれば一定の年数従軍するという市民の義務が、訓練なしには任務を果たせないという現実を明瞭にした。

社会が進展するにつれ、政府の手厚い支援がなければ軍事訓練や演習は次第に衰え、やがて廃れ、多くの国民の軍事的気概も弱まる。近代欧州の実情がそのことを物語っている。とはいえ、社会の安全は程度の差こそあれ市民のこうした気概に依存する。もともと、今日では気概だけで、規律正しく訓練された常備軍の支えなしに防衛を維持するのは難しい。しかし、市民が等しく兵の心構えを備える社会であれば、必要な常備軍の規模は小さくて済み、自由への脅威が現実であれ仮想であれ、その懸念は大きく和らぐ。

對外侵略に際しては軍の行動を後押しして遂行を容易にし、万一その力が憲政や国家の秩序に向けられる事態には、その進行を抑える歯止めにもなる。

古代ギリシャとローマの制度は、現代の民兵制度よりも国民の武の氣概を保つうえで格段に有効だった。制度は簡素で、ひとたび整えば自律的に機能し、政府の過度な監督がなくても高い活力を保てた。これに対し、現代の民兵制度は規定が複雑で、標準運用を維持するだけでも、政府による継続的で厳密かつ手間のかかる監督が欠かせず、それがなければたちまち形骸化し、やがて実施されなくなる。古代の制度は裾野も広く、国民のだれもが武器の扱いを学んだが、現代の民兵制度で同水準の訓練を受けられるのは、スイスを除けばごく一部にとどまる。そもそも、身を守ることも応戦することもできないほど臆病な者は、人として最も基本的な資質を欠いている。身体に必要な器官を失って大きな不自由を負うのと同様に、その心は損なわれ、ゆがむ。そして、幸福も不幸も心に由来する以上、その健全さが及ぼす影響は身体より大きい。ゆえに両者を比べれば、臆病はより深い不幸をもたらす。たとえ国民の武の氣概が社会防衛に直接資さないとしても、臆病が避けがたくもたらす心の損傷やゆがみ、惨めさの蔓延を防ぐことは、政府が最も重く受け止めるべき課題である。致命的でも急性でもない病であっても、たとえ

ばハンセン病のような感染症の蔓延を防ぐのと同程度に重要であり、ほかに公共の便益がなくとも、重大な害を未然に防ぐという一点で十分正当化される。

文明社会においても、社会の下層には判断力を麻痺させるほど根深い無知や愚鈍が少なからず見られる。知性を働かせない人は、臆病であること以上に軽蔑の対象となり、人間性の核を損なった存在と見なされがちだ。国家に直接の利益がないとしても、下層の人びとを無教育のまま放置してはならない。実際には、教育は国家にも相応の利益をもたらす。学びが進むほど、熱狂や迷信に惑わされにくくなるからである。無知が蔓延する国では、それが深刻な混乱の火種となる。さらに、教養と理解力のある人びとは礼節と秩序を保ちやすい。自分が尊重に値し、法に基づいて権限を持つ立場の人からも敬意を受けられると感じられるほど、権威への敬意も自然と強まる。党派や扇動者が私益にもとづいて煽る不平を吟味し、その仕掛けを見抜く力も高いので、政府の施策への不必要かつ無分別な反対に流されにくい。市民の政府運営への評価が統治の安定を大きく左右する自由な国では、市民がこれを軽率や気まぐれで判断しないようにすることが、とりわけ重要である。